令和６年３月１日

世田谷区立太子堂中学校
校長　髙山　知機　殿

世田谷区立太子堂中学校
学校関係者評価委員会
委員長　友野　清文

令和５年度学校関係者評価委員会報告書

はじめに　本報告を読まれる方へ

１．コロナ後の学校と教育について

感染拡大の四年目となった本年度の５月８日に、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが５類感染症になった。これにより多くの制約が撤廃され、通常の学校生活に戻ることができた。ただインフルエンザ等の季節外れの流行も見られ、日常的な感染症対策は引き続き求められる。

同時に、「コロナ後」の学校が、それ以前と全く同じような形を取り戻すことが望ましいかどうかは、考えてみるべきであろう。

例えば、全国的な傾向として、不登校児童生徒の数が急増している。文部科学省の「令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば義務教育段階での不登校児童生徒は約 30 万人であり、10 年前の倍に達した。この背景にコロナ禍の体験があることは確かであるが、これは必ずしも否定的な現象ではないかもしれない。ICT の活用で、学校に毎日通わなくても学ぶことができる状況になったと見ることもできる。あるいは、学校以外の学びの場の拡大もある。ある意味で「学びの方法や場の多様化」がコロナ禍により進行したのではないか。

敗戦後に「戦後社会（教育）」が生まれたように、今後「コロナ後の社会（教育）」が登場していくかもしれない。

以上のことは、直接本報告の内容に関わるものではないが、今後の本校の教育を考える上での基本的な問題となると思われる。

２．対話のツールとして学校評価

さてこれまでも学校評価の意義について述べてきたが、今年度も改めて指摘していく。

文部科学省の『学校評価ガイドライン』（平成 28 年改訂版）では学校関係者評価の意義

として、「教職員や保護者、地域住民等が学校運営について意見交換し、学校の現状や取組を知り課題意識を共有することにより、相互理解を深めることが重要であり」、「学校・家庭・地域間のコミュニケーション・ツールとして活用することにより、保護者・地域住民の学校運営への参画を促進し、共通理解に立ち家庭や地域に支えられる開かれた学校づくりを進めていくことが期待される」と述べられている。また世田谷区も学校評価の目的の一つとして「保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること」を掲げている。世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会は、これらを踏まえ以下のように報告を行う。報告は学校宛のものであるが、学校の HP に全文が掲載されることから、保護者や地域住民の方にも読んで頂くことを想定している。そのため先ず、報告にあたっての本委員会の基本的立場を述べておきたい。

「誰が子どもを育てるのか」を考えるとき、社会全体であるという答えがあるとしても、直接的には、教育基本法第 10 条に規定されているように、保護者であると言ってよい。学校教育はある意味で、親の教育の権利と義務の一部を、専門機関としての学校が肩代わりしているのである。そうであれば、保護者（そして地域の人々）も学校教育の当事者である。学校教育は教職員が中心となって行うものであるが、教職員の力だけで行うことができるものではない。

学校関係者評価は、生徒・保護者・地域が学校・教職員を評価し、意見を伝える手段であることは確かであるが、評価には一定の責任が伴うものであって、「学校関係者評価アンケート」は所謂「顧客満足度調査」とは異なるものであるべきであろう。

保護者や地域が、学校教育の「顧客」や「消費者」ではなく、子どもの成長に関わる「当事者」であるとすれば、評価は対話作り・関係作りの第一歩となるものである。文科省が強調するのも「学校評価は対話の手段である」ことである。学校（教職員）・保護者・地域住民・教育行政が各々の立場から関わっていくためのデータの一つが学校評価であって、決して学校を「値踏み」したり「序列化」したりするものではない。

子どもの成長に携わっている人たちが、各々の立場から意見を出し合い、学校をより良いものにしていくことが必要である。選択式のアンケートは、全体のおおよその傾向を把握するための一つの方法に過ぎない。ここから「対話」が始まるのである。

情報発信や情報提供が学校の重要な役割であることは確かである。しかし、それ以前に学校は生徒の教育を行う場である。たとえ「学校からの発信が十分でない」としても、それが「学校の様子を知らない」ことの理由にはならない。

家庭だけで子育てができないのと同様に、学校だけで教育ができるものではない。子ども（生徒）を真ん中にして、各々の関係者が多様に関わっていくことが、これからますま

す重要になってくるのである。「学校関係者評価」がその一つのツールとして機能することを願うものである。

Ⅰ　アンケートの分析報告

本報告書では、令和５秋に実施された「学校関係者評価アンケート」（生徒・保護者・地域対象）の分析を行う。（項目は「共通評価項目」「学校独自項目」）

回答は「自由意見」を除いて、「A　とても思う」「B　思う」「C　あまり思わない」「D　思わない」「E　分からない」からの選択式であり、本報告書では、A・Bを併せて「肯定的評価」、C・Dを併せて「否定的評価」とする。数値（％）の小数点以下は四捨五入した。

【アンケートの概要】

回収結果は以下の通りであった。

回答率は、

生徒	165名配布	153名回収	回収率	92.7％（昨年比　－1.7ポイント）
保護者	165名配布	153名回収	回収率	92.7％（昨年比　＋28.3ポイント）
地域	55名配布	29名回収	回収率	52.7％（昨年比　－2.8ポイント）

回収状況については、保護者がかなり増加した。昨年度は、回答方式がQRコードから入力に変更されたことにより回収率が大幅に低下したが、今回は学校で様々な工夫を行ったことで、以前の水準まで回復した。地域は例年半数程度の回収率であるが、現在の状況ではやむを得ないであろう。

・生徒アンケート

多くの項目で肯定的評価が 80％を上回っており、全体としての評価は高い。特に学習指導に関わる項目で「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中でとっている」の肯定的評価93％であり昨年度と同様非常に高い。「先生は、映像やタブレットなどのICTを利用し、分かりやすい授業をしている」は同 93％で、昨年度に比べて９ポイント高い。これも昨年度より２ポイント高い。他方で「授業では、考えたり話し合ったり、発表し合ったりする機会がある」の肯定的評価は81％で、昨年度より12ポイント低下している。3年生は93％が肯定的評価であるのに対して、1・2年生は70％台であり、「分からない」が10％台となっている。また「先生は、提出物やテストなどを分かりやすく評価している」への肯定的評価は 70％、否定的評価は 20％である。全体としては生徒が主体的に参加できる授業が展開されていると言える。評価についても、生徒の自己評価も取り

入れることなどで、生徒の主体的参加を図ることができよう。

生活指導等に関しては「私は、学校での過ごし方やルールについて考えて行動している」（肯定的評価 85%）が昨年度に引き続き高くなっている。「先生は、学校での過ごし方やルールを生徒に考えさせて指導している」の肯定的評価は 72%、「私は、先生が指導した学校での過ごし方やルールについて理解している」は 79%である。また「学校行事は、楽しい」「学校生活は、楽しい」「部活動は、楽しい」も肯定的評価が各々90%・88%・79%昨年度は各々94%･92%・74%）となっていて、昨年に続き、学校生活を「楽しい」と感じている生徒が大多数であると言える。「学校行事は達成感がある」「学校生活は達成感がある」「部活動は達成感がある」については、肯定的評価が各々87%・75%・75%である。「達成感」は主観的側面が強いが、様々な場面での「小さな成功体験」の積み重ねが重要であろう。

また学校独自項目である「困ったことがあったら誰かに相談することができる」の肯定的評価は 82%（昨年度は 87%）である。「基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いていると思う」は 87%（昨年度は 87%）である。

さらに、昨年度から学校独自項目に加えられた「相手の意見を聴きながら、自分の考えを正確に伝える力が身についている」については、80%が肯定的評価をしている。昨年度は学年が上がるほど高くなったが、今年度は学年による差は小さい。同じく昨年度からの新規項目であり、本校の教育目標の一つであるレジリエンスに関わる「様々な活動に主体的に取り組み、困難なこと直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身に付けている」についても、79%が肯定的評価であり（昨年度は 83%）であり、ここでも学年により違いは小さい（ただいずれの項目でも、2 年生の「とても思う」は 10%以下であり、「思う」が 60%以上である。それに対して 1 年生では、「とても思う」と「思う」はほぼ同数である）。

他方で、「私は、家庭で宿題や e ラーニングなどで学習をしている」の肯定的評価は 71%で昨年度の 62%より高くなったのに対して、学校独自項目である「宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するように工夫されている」は 69%で、昨年度の 79%より 10 ポイント低下した。また「家庭学習が定着しつつある」の肯定的評価は 65%で、昨年度の 77%から 12 ポイント。しかも 3 年生でも肯定的評価は 70%である。昨年度も触れたように、家庭学習や、家庭での ICT 活用や家庭学習については、依然として課題である。その際単に家庭学習の時間や量を増やすことではなく、家庭での学びの質・内容がどのようなものであるのがよいのかについては、根本的に考える必要があるのではないかと思われる。

キャリア教育については、「自分の進路や将来の仕事について、考える授業がある」「学校は、進路や将来の仕事に関する情報を提供している」への肯定的評価が、各々61%（昨年度は 65%）と 70%（同 74%）である。いずれも 3 年生の肯定的評価は多いが、1･2 年生は

否定的評価が 30～40％程度である。また「私は、キャリア・パスポートに書いた目標について、考えて行動している」と、学校独自項目の「『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた」の肯定的評価は、各々62％（昨年度は 61％）と 65％（同 59％）である。「キャリア・パスポート」については、3 年生の肯定的評価が高く、次いで 1 年生、2 年生となっている。キャリア教育については、各教科・総合的な学習の時間・特別活動の連携を一層図ると同時に、「キャリア・パスポート」が実質的な意味を持つように活用することが必要であろう。

・保護者アンケート

生徒と同様に、全体としては肯定的評価が高くなっている。とりわけ、「学校行事は生徒にとって楽しい」（94％　昨年度は 93％）・「本校の学校生活は、子どもにとって楽しい」（88％　同 87％）・「部活動は、子どもにとって楽しい」（79％　同 82％）など、保護者も生徒が学校生活を楽しんでいると考えている。また「本校は、様々な便りなどで、保護者に情報を提供している」（98％　昨年度も 93％）・「本校はホームページやメールなどで、保護者に情報を提供している」（89％　同 96％）と、学校からの情報提供についても高い評価がされている。他方で「本校は、保護者に指導の重点を伝えている」への肯定的評価は 74％（昨年度は 77％）、「私は、今年度の学校の指導の重点を理解している」は 56％（同 60％）である。この項目の 3 年生の否定的評価は 42％である。保護者は、学校からの「情報発信」は十分であると考えてはいるが、「指導の重点」という教育方針を十分に理解しているとは思っていないと言えよう。

学習指導については「本校は、子どもが考える事や、課題を解決することを大切にした授業をしている」（肯定的評価 71％）・「本校は、考えたことを話し合ったり、発表し合ったりする機会がある」（同 74％）では肯定的評価が高いが、「分からない」が各々16％と 19％ある。また「本校は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している」（肯定的評価 51％）、「本校は、映像やタブレットなどの ICT を利用し、分かりやすい授業をしている」（同 52％）では、肯定的評価が半数程度であるのに対して、一定の否定的評価と 30～40％程度の「分からない」がある。これは昨年度も同じ傾向であった。授業の様子を保護者が知るのは難しいかもしれないが、保護者も学校公開等に積極的に参加したり、家庭で子どもから授業の様子などを聞いたりすることを通じて、学習指導のあり方に関心を持つことを期待したい。

生活指導については「本校は、学校での過ごし方やルールについて子どもに考えさせる指導をしている」の肯定的評価が 71％で、「本校は、教員が指導した学校での過ごし方やルールを子供が理解している」が 77％である。昨年度はいずれも 91％であった。保護者や生徒

が、きまりやルールの意味を考え理解できるようにすることが必要であろう。

キャリア教育・進路指導については、「本校は、子どもの進路や将来のことについて、考える授業がある」「本校は、進路や将来の仕事に関する情報を提供している」への肯定的評価が、各々63%と 65%である。また「本校は、キャリア・パスポートに書いた目標について子どもに考えさせる指導をしている」と、学校独自項目の「生徒は、『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた」についての肯定的評価は、各々54%と 48%で、「分からない」が各々31%（昨年度は 43%）と 29%（同 30%）である。「キャリア・パスポート」の認知度は、昨年よりは高まっているが、さらに保護者に存在と意義を伝えることが求められる。

生徒アンケートで触れた学校独自項目の「生徒は、相手の意見を聴きながら、自分の考えを正確に伝える力が身についている」と「生徒は、様々な活動に主体的に取り組み、困難なこと直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身に付けている」については、肯定的評価が各々66%（昨年度は 77%）と 74%（同 75%）である。いずれも 2 年生で最も肯定的評価が高くなっている。

・地域アンケート

地域については、多くの項目で肯定的評価が 80%を超えている。特に、「生徒一人一人を大切にするが授業や学校行事が行われている」「学校からのお知らせ（学校だより）などにより、学校の様子が分かる」についての否定的評価はない。その中で、昨年度と同じように「学校協議会や合同学校協議会が役割を果たしている」「学校運営委員会は活動を周知し、役割を果たしている」は、肯定的評価が 62%と 73%とやや低く、否定的評価もある、また「家庭学習が定着しつつある」の肯定的評価は 45%である（「分からない」が 62%）。地域の関係者は、保護者以上に学校を訪れる機会が制限されていたため、学校教育の内容や生徒の姿について「分からない」という回答が多いのは当然であろう。昨年も指摘したように、「社会に開かれた教育課程」の実現の一環として、地域に開かれた学校になるとともに、地域が学校を支える存在であり続けることを期待したい。なお、学校独自項目については、「分からない」が半数を超える設問については、再検討することも考えられよう。

Ⅱ　重点目標について

昨年度末（令和 5 年 3 月 31 日）に出された「令和 5 年度に向けた改善方策」では、以下

の３点の重点目標と、それに関わる「数値による指標」が示されていた。「数値による指標」については「学校関係者評価アンケート、生徒アンケート、各学力調査等を分析し検証を行う」とされているため、本項では、「学校関係者評価アンケート」の結果から判断できる範囲で検討する。

重点目標１　一人一人を大切にする教育の推進

◎一人一人を大切にする教育の推進
◎レジリエンスの育成
◎　社会を生き抜く力を身に付ける
〈数値による指標〉
（１）学校生活は楽しい。（生徒：90％以上）
（２）少人数だからできる事が授業や学校行事で行われている。（生徒：80％以上）
（３）困ったことがあったら誰かに相談することができる。（生徒：80％以上）
（４）本校は、生徒一人一人を大切にした教育を行っている。（保護者：80％以上）
（５）「キャリア・パスポート」を使用し、普段の学習や生活を振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた。（生徒：70％以上）

（１）については「学校生活は、楽しい」の肯定的評価が 88％である。1 年生 92％、2 年生 86％、3 年生 85％であり（昨年度は全学年で 90％以上）、やや達していない。なお「学校行事は、楽しい」の肯定的評価は 90％である。

（２）については、これに対応する「一人一人を大切にする授業や学校行事で行われている」への肯定的評価が 79％（1 年生 58％・2 年生 81％・3 年生 69％）で、1 年生が目標に達せず、全体としても目標に達していない（昨年度は「少人数だからできることが授業や学校行事で行われている」という設問に対する肯定的評価は 77％であった）。

（３）については「困ったことがあったら誰かに相談することができる」への肯定的評価が 82％（1 年生 84％・2 年生 74％・3 年生 87％）で、2 年生が若干低いが、全体として目標に達している。

（４）については、保護者に対する「生徒一人一人を大切にした授業や学校行事で行われている」への肯定的評価が 70％（1 年生 58％・2 年生 81％・3 年生 69％）で、2 年生以外は目標に達していない（否定的評価と「分からない」が同程度である）。なお「本校は、丁寧に指導している」の肯定的評価は 83％である。

（５）については、「『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた」

の肯定的評価は 65%（1 年生 62%、2 年生 57%、3 年生 75%）で、3 年生が目標に達している(1・2 年生が低いのはアンケートの実施時期も関係しているかもしれない)。

以上のように、今年度の本目標の達成状況はやや厳しいものになっていると言える。

重点目標２ 学力の向上を図る教育の推進

◎「わかる授業」の展開

◎家庭学習への取組（習慣化）

〈数値による指標〉

（１）わかりやすい授業をしている。(生徒・保護者：85%以上)

（２）宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するように工夫されている。
（生徒・保護者：80%以上）

（３）家庭学習が定着しつつある。(生徒・保護者：80%以上)

（４）水曜学習教室や家庭学習、夏休みの学習教室は、生徒の基礎学力の補充・向上に役立っている。(生徒：70%以上)

（１）については、生徒の「先生は、映像やタブレットなどの ICT を利用し、分かりやすい授業をしている」への肯定的評価が 93%で、全ての学年で 90%を上回っている。保護者の「本校は、映像やタブレットなどの ICT を利用し、分かりやすい授業をしている」への肯定的評価が 52%（「分からない」が 31%）である。ただこの項目は二つのことを問う設問になっているため、「分かりやすい授業」についての評価をこれだけで判断することはできない。他の項目と考え合わせると、授業についての生徒の評価は概ね高くなっており、現在の取り組みを引き続き行うことを期待する。

（２）については、学校独自項目で、生徒の「宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するよう工夫されている」の肯定的評価が 69%（1 年生 68%・2 年生 64%・3 年生 76%)、保護者の「学校は、宿題や課題などを適切に設定し、家庭学習が充実するよう工夫している」が 57%（1 年生 51%・2 年生 63%・3 年生 56%）で、昨年度よりかなり低く、目標に達していない。

（３）については、学校独自項目の「家庭学習が定着しつつある」についての肯定的評価は、生徒が 65%（1 年生 67%・2 年生 57%・3 年生 70%)、保護者が 55%（1 年生 42%・2 年生 49%・3 年生 72%）である。昨年度は各々77%と 75%であったので、この項目も低下しており、目標に達していない。概ね、学年が上がれば高くなる傾向にはあるが 80%にはやや及ばない。先にも述べたように、家庭学習や宿題は、引き続き検討課題であると言える。その際、塾の利用の有無、部活動やスポーツクラブへの参加の有無など、生徒の状

況の違いがあることなどを考えれば、可能な限りで個別の働きかけも必要であろう。全ての生徒の基礎学力の定着・向上を図るための取り組みを期待したい。

（４）については、学校独自項目で、生徒の「水曜学習教室や家庭学習、夏休みの学習教室は、生徒の基礎学力の補充・向上に役立っている」への肯定的評価は 41%（昨年度は 56%）である。(ちなみに保護者に対する同じ設問では 47%)。どの学年でも否定的評価より「分からない」の方が多く（約 30%)、昨年度より増えていることから考えると、より参加を促すことが必要であろう。

以上のように､学校関係者評価アンケートで見る限り､学習についての目標については、昨年と同様に数値による指標には達していないものが多く、肯定的評価が下がっている場合もある。今後とも「学力向上」への取り組みが望まれるが、その際、授業方法や学習時間だけでなく「生徒が将来必要とする資質能力とは何か」を考えることが重要であろう。

重点目標３　生徒の主体的な活動の活性化

◎ 生徒が主体として取り組む学校行事の実践

◎ 生徒理解に基づく信頼関係構築の強化

〈数値による指標〉

（１）基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いている。
（生徒・保護者・地域：80%以上）

（２）部活動は楽しく、達成感がある。(生徒・保護者：85%以上)

（３）「大志の学び舎」の活動は、小学校との適切な交流がなされている。
（生徒：80%以上）

（４）相手の意見を聴きながら、自分の考えを伝える力が身についている。
（生徒：90%以上）

（５）様々な活動に主体的に取り組み、困難なことに直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身につけている。(生徒：90%以上)

（１）については、学校独自項目で、生徒の「基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いていると思う」は肯定的評価が 85%（1 年生 78%・2 年生 86%・3 年生 91%）である。保護者の「生徒は、基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いている」の肯定的評価は 83%（1 年生 85%・2 年生 75%・3 年生 86%）であって、生徒・保護者とも目標に達している。なお、地域の「生徒は、基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いている」の肯定的評価も高い。

（２）については、生徒の「部活動は、楽しい」「部活動は、達成感がある」への肯定的

評価は各々79％（1 年生 84％・2 年生 84％・3 年生 71％）と 75％（1 年生 81％・2 年生 76％・3 年生 69％）である（保護者についての同一の設問では、79％と 73％である）。3 年生で肯定的評価が低下するのはやむを得ないことであり、1・2 年生については、概ね目標を達成している。

（３）については、学校独自項目で、生徒の「『大志の学び舎』の活動は、小学校との適切な交流が行われている」へ肯定的評価は 54％である（保護者への同様の設問への肯定的評価は 64％）。なお共通項目で、生徒の「学び舎の小学校に行ったり、小学生が来たりする機会がある」への肯定的評価は 43％である（保護者の「本校は近隣の小・中学校で構成する「学び舎」の小学校に行ったり来たりする機会がある」の肯定的評価は 63％である）。数値的には目標に及ばないが、今後様々な活動が行われることを期待する。

（４）については、学校独自項目の「相手の意見を聴きながら、自分の考えを正確に伝える力が身についている」の肯定的評価は 80％であった。

（５）については、学校独自項目の「様々な活動に主体的に取り組み、困難なこと直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身に付けている」についても、79％が肯定的評価であり（昨年度は 83％）である。

（４）と（５）は、90％の肯定的評価を目標数値としているため、いずれもそれには及ばないが、様々な場面で、生徒が協働的・主体的に活動できる取り組みを期待するものである。

この重点目標では、基本的生活習慣については数値による指標に十分達している。部活動については、様々な議論がなされているが、生徒にとっての意義と教職員の負担を考慮に入れながら、教員・生徒・保護者が話し合う中で、改善の取り組みが行われることを期待する。

Ⅲ　総括と次年度への提言

学校関係者評価アンケートの結果は、学習指導・生活指導・進路指導/キャリア教育、をはじめとして、すべての面で概ね良好であると言える。本校の学校教育は、地域に根ざした伝統校として、一人一人を大切にして展開されていると言える。冒頭で述べたように、今後「コロナ後」の学校の姿があらわれることを期待し、以下の提言を行う。

1　生徒が見通しを持って自ら学習を進めていく力を養うために、「問題解決」や「探究」を行い、主体的に参加できる授業をさらに推進する。そのために、学校内外での授業研究の機会を確保し、ICT 活用を含めた学習指導のあり方を考究する。

2　一昨年 12 月に改訂された『生徒指導提要』についての共通理解を持った上で、生徒が学校生活について自ら決める場面を増やす。また教職員と生徒・保護者との信頼関係を一層深め、生徒が学校生活の主人公となれる生活指導を行う。

3　レジリエンスの意義を確認し、安定した自尊感情や自己肯定感が持てるようにする。

4　進路指導と当時に、生徒が自己の将来の生き方・あり方を考えられる機会や情報を提供する。特に、各教科教育の中にキャリア教育の視点を導入する。

5　学校行事を含む特別活動と部活動についてはその意義を踏まえ、必要な見直しを行う。

6　地域との連携を一層進めると同時に、学校の教育方針や状況についての理解が深まる情報発信を行う。

以上

令和５年度世田谷区立太子堂中学校
学校関係者評価委員会
委員長　友野　清文
委員　　石川　由喜夫
委員　　田子　美由紀
委員　　髙島　美和子
委員　　杉山　美以子